

グループ形成方法が体育授業に及ぼす影響について

学籍番号 239339

氏名 玉井奈那

主指導教員 井上功一

副指導教員 小川剛司

1. 緒言

1-1 研究背景と目的

近年グローバル化や情報化が急速に進展しており予測困難な時代を迎えようとしている。変化の激しい社会を生き抜くために、子どもたちは変化を受け止め、より豊かに生活していくための「生きる力」を育むことが求められている。そのためにも、子どもたちが主体となり自己の考えを形成し、他者との対話を通じて新たな知識や視点を得る「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた学びが重要視されている。その中で、目標の達成に向けて他者と協力する「協働学習」は、学習の定着のみならず社会的側面の促進や互恵的相互関係の構築等といった様々な効果があると言われている。また、協働学習はグループメンバーと活発な活動や意見を言い合えるような教え合い関係を構築することが重要であると言われている。しかしながら、具体的なグループの形成方法は明らかになっておらず、授業者が学習を進める中で目的や意図に応じた最適なグループ分けは解明されていない。そこで本研究は、様々な分け方でグループを構成し、学習を行う中でグループ間の違いや特徴を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

2-1 グループの形成方法

本研究では、運動能力がグループ間で等質となる「運動能力グループ」、社会的責任行動得点がグループ間で等質となる「社会的責任行動グループ」、体育における学習意欲がグループ間で等質となる「学習意欲グループ」、生徒が主体となってグループのメンバーを決める「生徒主体グループ」の4つのグループを設け、単元が終了するまで常に同じグループで実施した。

2-2 調査内容

大阪府内の高等学校3年生女子計171名でバレーボールの授業を実施した。

本研究は6つの調査を行った。まずグループ学習に対する肯定的認知の測定を単元前後で実施した。さらにスキルテストの基礎的パスとサーブの単元前後の得点、ゲーム中の生徒の様子、グループと個人の振り返りコメント、ゲーム終了後の振り返りの逐語記録から分析を行った。

3. 結果及び考察

3-1 スキルテスト及びゲーム終了後の生徒の様子

スキルテストの基礎的パス得点においては、単元後にかけてどのグループも上昇が見られた。これは、実践時間による技能の向上に加えて他者と協力することによる影響も考えられる。

またスキルテストのサーブの技能点においては、運動能力グループでのみ単元後に上昇が見られた。運動能力グループはゲーム終了後の振り返りの時間にサーブに関する発言を多くしていたことから、運動能力の高い生徒を中心に最もミスが減らしやすいと言われているサーブに焦点を当て勝敗を意識していたのではないかと考えられる。一方で学習意欲グループは有意ではないものの若干の減少が見られた。さらにゲーム終了後の振り返りからは、サーブと関連した発言が少なくサーブに対する意識が低かった。学習意欲の高い生徒はバレーボールの楽しさや興味をサーブで点が入ることよりもチームのメンバーとラリーを続けることで感じ取っていたのではないかと推察できる。

3-2 ゲーム中の生徒の様子

ゲーム中の譲り合い回数において、学習意欲グループと生徒主体グループの間に有意な差が見られ、さらに、生徒主体グループの振り返りコメントからも意思疎通できたという記述が多く見られた。生徒主体グループは仲の良い生徒で構成されたグループが多かったことからコミュニケーションが取りやすく意思疎通ができていたのではないかと考えられる。一方で生徒主体グループ以外のグループにおいてもグループの振り返りコメントから意思疎通を図ろうという記述が多く見られ、ゲームを通じて他者と協力しようという気持ちが表出していた。

4. まとめ

本研究では、グループでの学習を通して4つのグループ形態の違いによる特徴を検討した。

まず、運動能力グループはミスが減らしやすいサーブに焦点を当て勝敗を意識していたことから、勝敗が意欲の変化をもたらす要因になり得ると示唆された。また、運動能力の低い生徒が学習について行けず集団で孤立する可能性が懸念されるため、教員の介入や集団で取り組める課題を設定することが求められる。

学習意欲グループは、仲間との協働が意欲の変化をもたらす要因であると示唆された。学習を進める中で、学習意欲の低い生徒に引っ張られ意欲の低下が懸念されるため、学習を通して成果物を作成したり、発表したりする機会を設けることが望ましいと考えられる。

さらに生徒主体グループは、他者との交流や調和の取れた関わりが意欲の変化をもたらす要因になり得ると示唆された。また、グループを形成する際は生徒や集団の状況を考慮し、教員が部分的な適応を行うことが必要となる。

一方で社会的責任グループは、社会的責任行動得点が生徒間でほとんど差がなかったことから特徴的な結果は見受けられなかった。そのため、集団として社会的責任行動を目安にグループを形成することよりも、個人が持っている社会的責任行動の特徴を生かせるような指導を考えることが必要である。